金沢の昔話

金沢の民話　刊行によせて

金沢区長　横松　進一郎

金沢は、古来温暖な気候に恵まれ鎌倉時代からは交通の要衝としても栄えてきました。

このため歴史的資産となる寺社も多く、地域にはさまざまな面白い民話が伝承されています。

これらの民話は、金沢の歴史を物語るとともにそれらを支えた人々の日々の暮らしが垣間見える大変貴重な文化的資料となっています。

さて、このたび金沢区では、青少年文化伝承・交流事業として地域に伝わる民話を次世代の区民へ伝承していくことをめざして数多い民話の中から読み聞かせにも適した七話を選び小冊子を刊行いたしました。

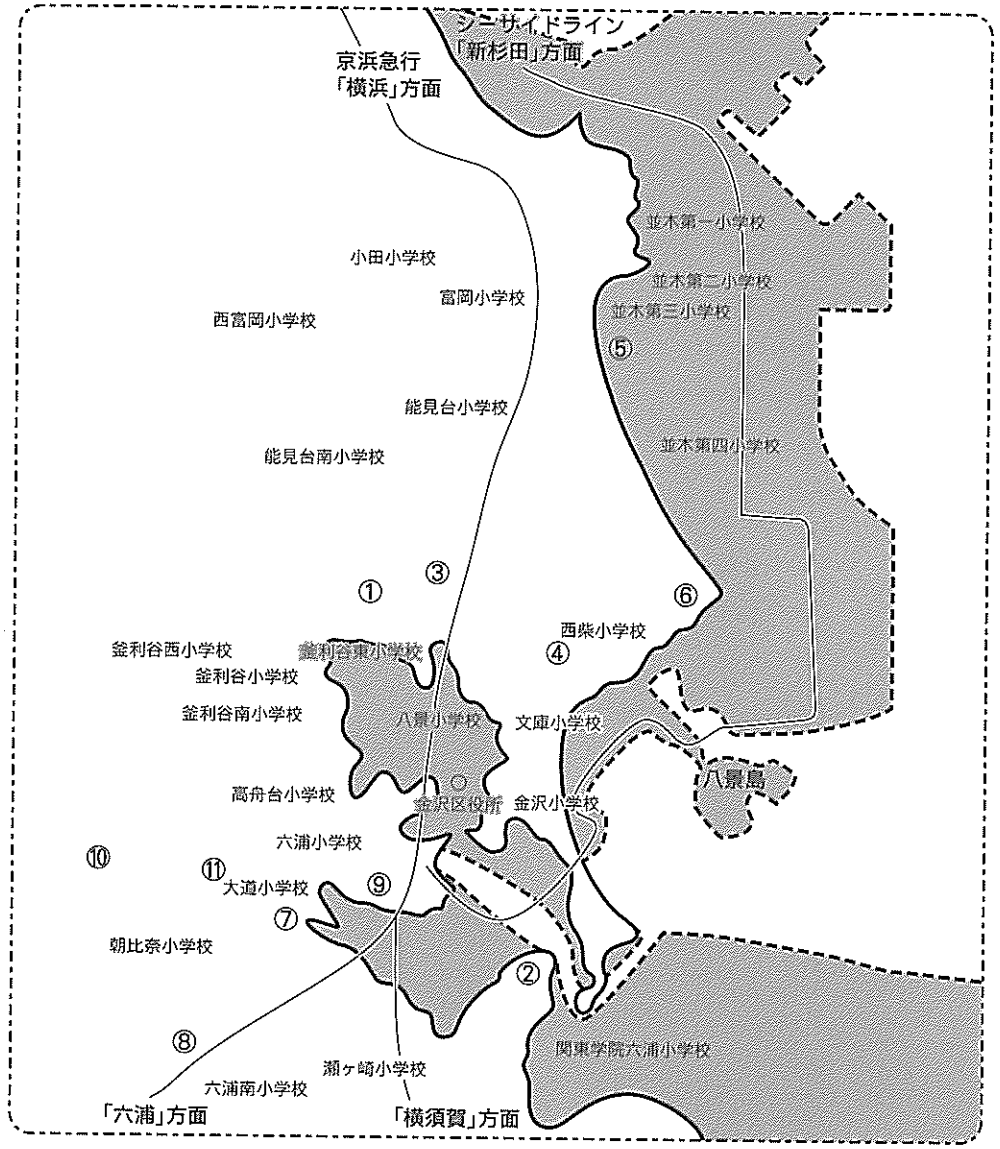
一人でも多くの方々にお読みいただき世代を超えて読みついでいただければ幸いです。

この小冊子をとおし金沢区への郷土愛が育まれることを願ってやみません。

最後になりましたが、本書をつくるにあたり金沢区文化協会をはじめ多くの方々にご協力いただきました。心から感謝申し上げます。

（かなざわこんじゃくちず）

金沢今昔地図



～『物語』ゆかりの場所～

①能見堂跡	「筆すての松」
②太寧寺(旧)	「へそ薬師」
③太寧寺(現)	〃
④称名寺	「長浜の身代わり観音」
⑤長浜	〃
⑥小柴	〃
⑦千光寺(旧)	「金沢猫」
⑧千光寺(現)	〃
⑨上行寺	「日荷上人」
※④称名寺	〃
⑩朝比奈切通し	「塩なめ地蔵」
⑪宝樹院	「目つぶし阿弥陀」

——— 「鎌倉～江戸時代」頃までの海岸線

- - - - - 現在の海岸線

【注意】①～⑪及び各小学校の場所は、実際と多少誤差がありますので御了承ください。また、入り海部分の旧海岸線は絵図等から推定した想像図です。

【参考】金澤今昔地図（平成9年2月発行）

目次

第一話　筆すての松　1
第二話　へそ薬師　2
第三話　長浜の身代わり観音　4
第四話　金沢猫　6
第五話　日荷上人　8
第六話　塩なめ地蔵　10
第七話　目つぶし阿弥陀　11

筆すての松

今から千年ほど昔、現在の能見台の森の山のてっぺんの道端に能見堂と言う小さなお堂がありました。お堂から見える金沢の景色はとても素晴らしく、そこを通る人達は、そばに立っている松の木に寄りかかって景色を見ていると、あまりの美しさに心が洗われ、長い旅の疲れもとれ、元気が出ました。

ある時、その噂を聞いた巨勢金岡という絵描きさんが、評判の『世にも美しい景色』を描こうと思い、やって来ました。松の木に寄りかかって景色を眺めると、空は青く澄み渡り、近くの木々は緑に萌え、その木々の緑の間から見えるのは瀬戸の海。波はキラキラ輝き、海岸に並んで立つ美しい松。日暮れには夕日にそまる海の色など、評判どおりの美しさで、見ていると描くことを忘れる程でした。

しばらくしてから我にかえった絵描きさんは、筆をとり、美しい海や山を眺め一生懸命に描き始めましたが、それがあまりにも美しすぎて、描こうとすればする程、筆は動かなくなりました。

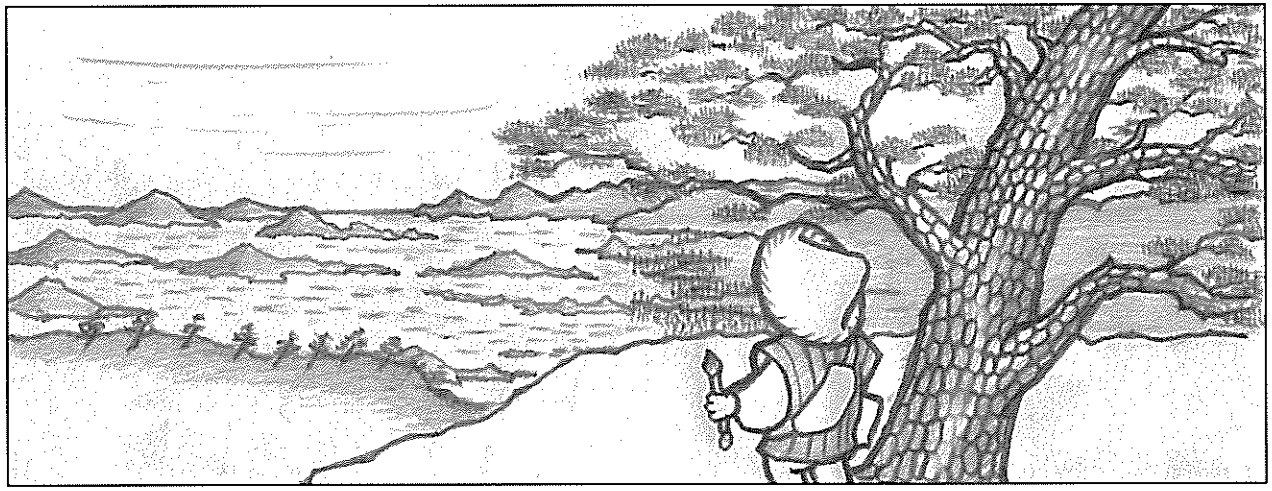
それでも頑張って、何度も描き直しましたが思うように描けず、とうとう手にしていた筆を松の木の下に投げすて立ち去ってしまいました。

それから、この松を『筆すての松』と呼ぶようになりました。

それからも、周囲3メートルもあったという松の木は旅に疲れた人々の心を慰めるように大正時代まで立っていたそうです。

今では、その場所も笹がたくさん茂り、人もあまり通らず寂しくなってしまいましたが、『筆すての松』が立っていたらしき跡は今も残っています。

文　氏家　總子（ふさこ）
絵　小泉　喜久江（きくえ）



へそ薬師

金沢文庫駅近くの谷津という所に『太寧寺』というお寺があります。

御本尊様の薬師如来様は『へそ薬師』とも呼ばれていますが、けっしてそのお顔が『おへそ』に似ていたからではありません。

では、どうして、こんな変わった名前がついたのでしょうか？

今から８００年ほど前、この村にたった一人で暮らしている娘がいました。裏の畑でできるほんの少しの野菜と、村人の手伝いでもらう、僅かなお金で暮らしていました。

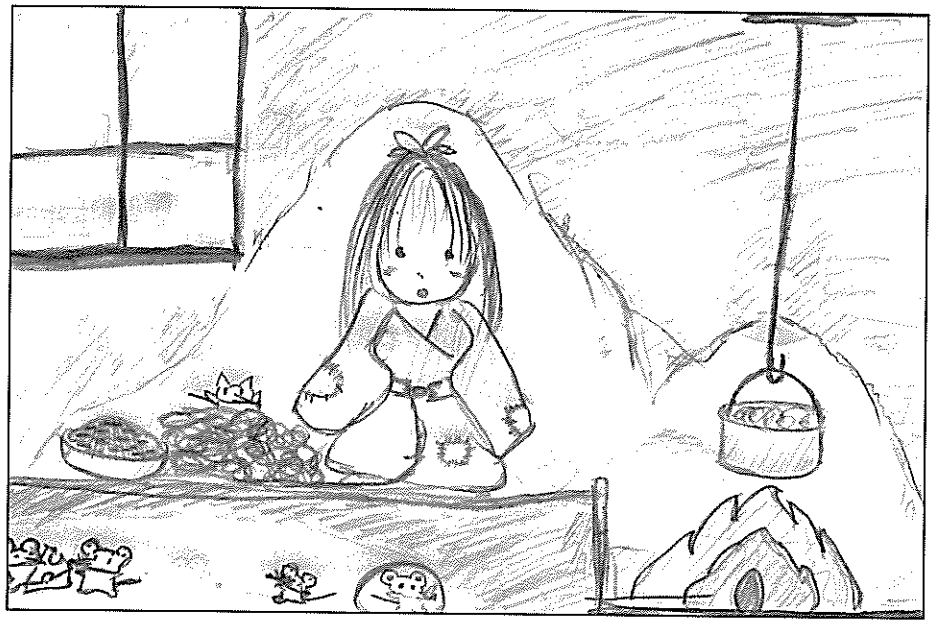
両親の命日が近いある年のことです。仏壇へ供える物と言えば、裏の畑にあるお芋だけ。お金もなく、お坊様にお経を頼むこともできません。命日なのに両親に何も出来ないことが悲しくて、その夜、ぼんやりと月を見上げていると、ポタリと涙がこぼれました。しばらくして娘はふっと亡くなった母親が残してくれた麻糸の束が一つある事を思い出しました。・・・そうだ、あれをつむいで『へそ』にして売れば、そのお金でお線香が買える。お坊様にお経を頼むこともできる・・・と思い、すぐに麻糸の束を取り出して、一晩中寝ないで沢山の『へそ』を作りました。

（『へそ』と言うのは、紡いだ麻糸をつなぎ、「はた織り機」にかけやすいように、輪の形に幾重にも巻いて、おへそのような形にした糸玉のことです。）

次の日、娘は『へそ』を売りに行きました。

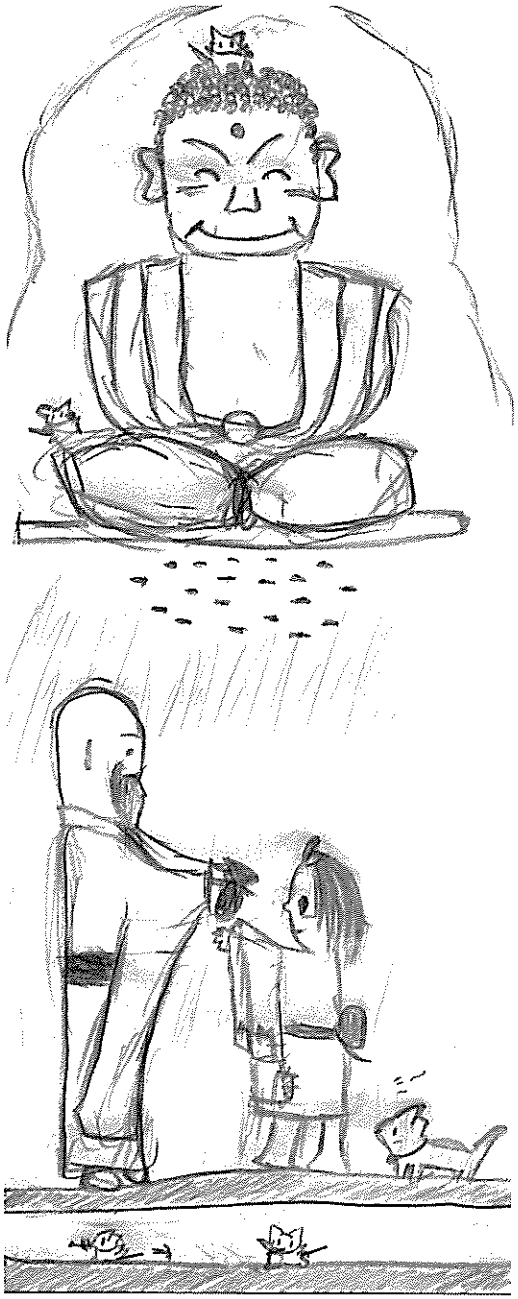
恥ずかしいのを我慢して、大きな声で売り歩きましたが、買い手はなく次の日もその次の日も足が棒になるくらい歩きましたが「へそ」は一つも売れず、とうとう命日は明日になってしまいました。娘は心の中で両親に謝りながら日暮れの道をトボトボと家の前まで来た時、後ろからだれかに声をかけられました。

振り返ると、この辺りでは見たことのない男の子でした。



「お母さんから『へそ』を買って来るようにいわれました。どうか、それを売ってください。」と言って、娘の持っていた『へそ』を全部買ってくれました。「ありがとう、これで命日のお供え物を買うことができる。だけどあなたはあまり見かけないけれどどこに住んでいるの？」と言うと、男の子は「すぐ近くに住んでいます。」と言い、『へそ』をかかえ、夕暮れの中へ消えてしまいました。娘はあまりの嬉しさに夢ではないかと思いましたが、手のひらにはちゃんと金貨がありました。早速、線香や両親の好きだった、お供え物を買いましたが、何となくさっきの男の子の事が気になったので、お寺に行ってお坊様に話しました。

話を聞いたお坊様は、娘を本堂の御本尊様の所へ連れて行きました。娘は御本尊様の前に、さっき、自分が男の子に売った『へそ』があるのを見て、大変驚きました。「昼間はここに『へそ』はなかったが、ついさっき見たら沢山おいてあるので、不思議なこともあるもんじゃと思っておったが、今お前さんの話をきいてよくわかった。これはきっと、お前さんの親孝行を見ていた御本尊様が、男の子の姿になって、お前さんから買ったのじゃろう。御本尊様はいつも、空から一生懸命生きている人を見ていて、困っていると助けてくれるんじゃ。この『へそ』は持って返ってお前さんの着物を作りなさい。」と、お坊様はいいました。「御本尊様、お坊様、本当にありがとうございました。」娘は、うれし涙を流して、心からお礼を言いました。それからのこと、村人達は、この御本尊様を『へそ薬師』と呼ぶようになったそうです。



文　氏家　總子（ふさこ）

絵　佐々木　怜奈（れいな）

長浜の身代わり観音

金沢区の称名寺に『海中出現観世音菩薩』がまつられています。

この仏様、昔の名前は「長浜観音」という長浜観音堂の御本尊でした。

それがどうしてこんなに長い名前に変わって、称名寺にあるのかをお話ししましょう。

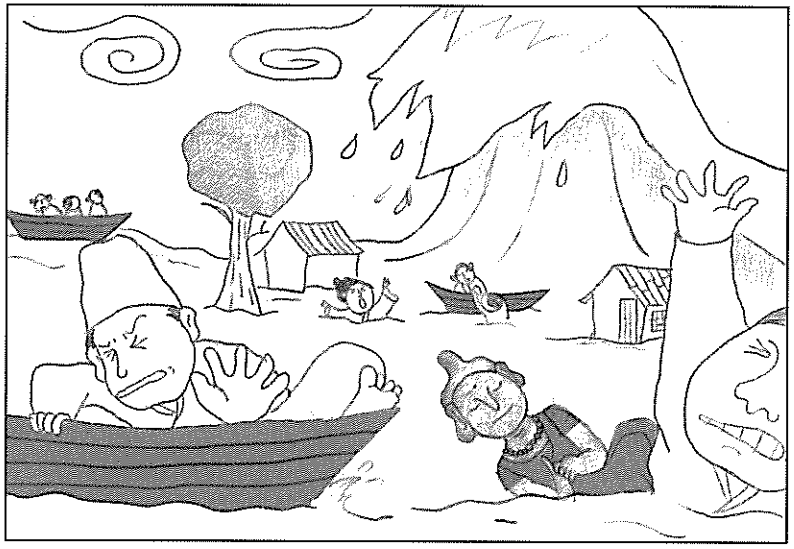
今から700年程昔、長浜の村人達の大半が漁師で、いつも観音堂の観音様にお参りをしていました。人々は観音様を信じ大切に思い、観音様はそんなみんなを見守っているようでした。

ところが、ある日突然、不幸な出来事が起こりました。

今までに見た事も聞いた事もない大きな「津波！」。波は海の向こうに「グワーッ」と現れ、幾重にも重なり、ものすごい早さで海岸に押し寄せ、それはたちまち大きな津波となり、「アッ」と言う間に村と観音堂を呑み込んでしまいました。一瞬で海に投げ出された人々は、荒れた海の中でひたすら祈り口々に助けを求めました。すると不思議なことが起こりました。暗い海のどこからか沢山の舟が現れたのです。村人達は夢中で舟にしがみつき飛び乗りました。全員が助かり無事を喜び合った村人達は、観音堂も流された事を知りました。夢中で観音様を探し始めた時、村人達はなにか声を聞いたような気がしました。声はだんだん大きくなり、どうやらそれは深い海の底から盛り上がるように聞こえて来る観音様の声でした。

「早く舟を出しなさい。そして舟が着いたところに住むのです。みんなで力を合わせて新しい村を作りなさい。そこを『小柴』と呼んで、仲良く暮らすがよい。」と言うと、声はスーッと海に呑まれて消えてしまいました。村人達は、長浜の観音様が身代わりになって、自分達を助けてくれた事を知りました。みんなは観音様に両手を合わせ、一生懸命舟をこぎ、思い出の沢山残る長浜の海岸を去りました。

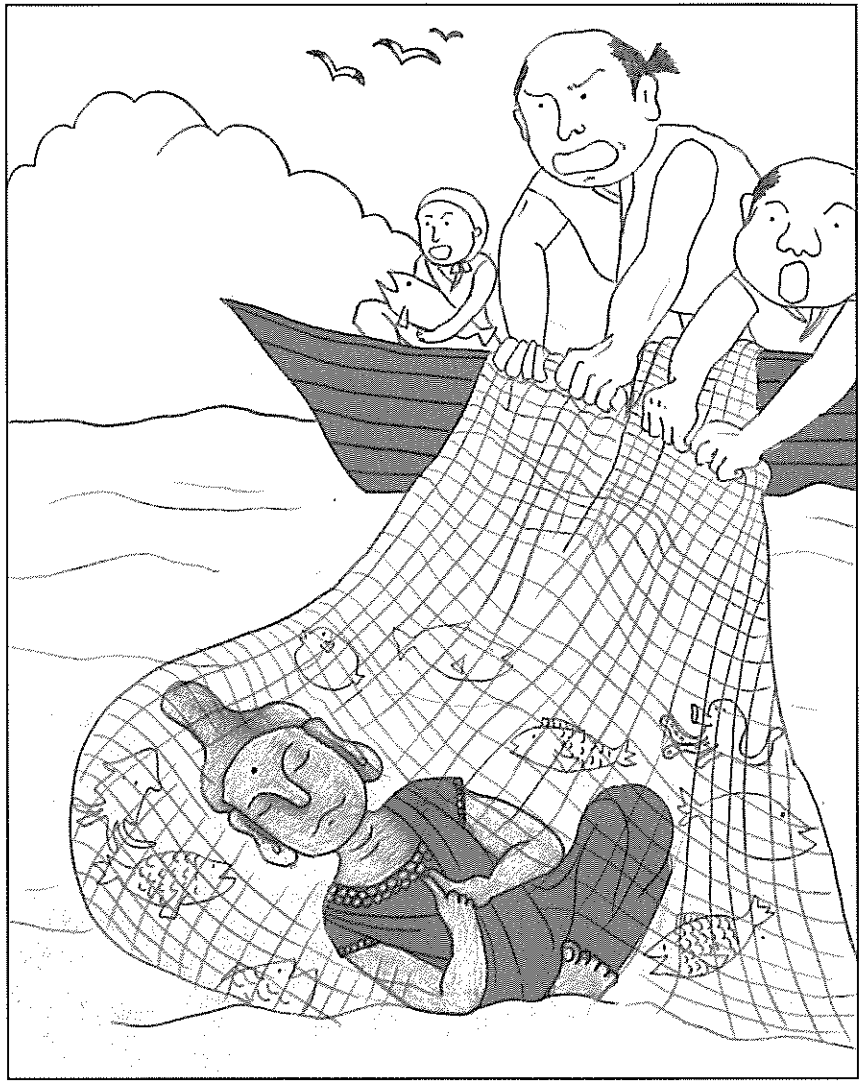
小柴に着いた村人達は観音様の教えのとお



り、力を合わせそこに新しい村を作りましたが村人の心からは、身代わりになってくれた観音様の姿が消えることはありませんでした。

やがて時が経ち、あの時海に投げ出された子ども達もすっかり大人になり、海で働く漁師になりました。そして、ある年の秋、海から網を引き上げていた村人達は、何かピカリ！と網の底で光る物を見ました。とても不思議な光に、「なんだろう？」と、みんなで引き上げると、村人達がいつも心の中で感謝していた観音様だったのです。村人達は泣いて喜びました。海から引き上げられた時、長い間海に沈んでいた観音様の体には沢山の貝殻がついていましたので「貝付観音」とも呼ばれるようになり、村人達は立派なお堂を建て「身代わり観音」として大切にまつりました。

その後いつの頃からか称名寺に移され、海から現れた由来のとおり『海中出現観世音菩薩』と言う長い名前になってまつられています。



※この民話に書かれている長浜の大津波についての歴史的事実は確認されていません。

文　氏家　總子（ふさこ）

絵　池田　利恵

金沢猫

今から８００年程前、六浦港（今の平潟湾）に三艘と言う船着場がありました。

ある年の秋、村人が畑仕事をしていると、畑の真ん中に何か大きな物を見つけました。近寄ってみると、かなり年を取った大きな猫が死んでいました。その猫の顔は何となくほほ笑んでいるように見えました。それは村人達が、いつも可愛がっていた猫でしたので、畑に埋め、花を供えてお経をあげました。そして、故郷を遠く離れた日本で、沢山の可愛い子孫を残し、唐の国に帰ることなく死んだ猫のために祈りました。

その何年か前

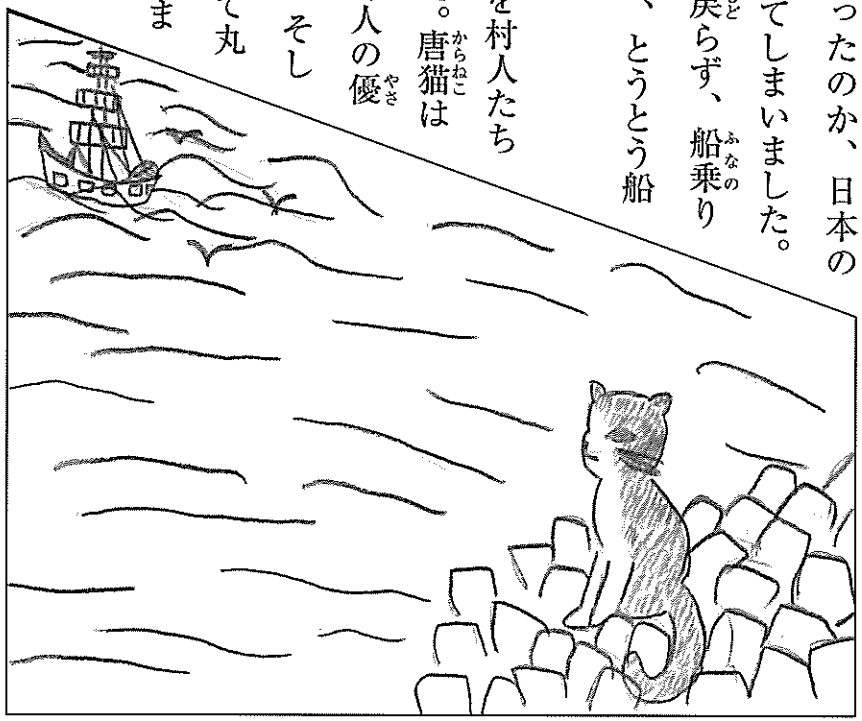
この猫は「からねこ（唐猫）」と言いました。その名のとおり、唐（今の「中国」）から船にのって来ました。毛の色は白、黒、黄色の三色で、尻尾は日本の猫より長くとても大きな猫だったそうです。

当時、金沢を治めていた、学問の好きな北条実時と言う武将が、その頃、栄えていた唐の国からたくさんの品物を船で三艘の港に運んでいました。その時、大切な品物がねずみにかじられるのを防ぐため、一匹の唐猫が一緒の船に乗せられて来ました。

唐猫は、長い船旅がとても退屈だったのか、日本の港に着くと真っ先に船から飛び下りてしまいました。そして、船が唐へ帰る日になっても戻らず、船乗りたちが一生懸命探したが見つからず、とうとう船は帰ってしまいました。

船に乗ることが出来なかった唐猫を村人たちは可哀想に思いとても可愛がりました。唐猫は生まれた国へ帰れませんでしたが、村人の優しさに包まれて幸せに暮らしました。そして、この辺りの猫と仲良くなり、やがて丸い目をした可愛い子猫がたくさん生まれました。

この子猫たちは「金沢猫」と呼ば

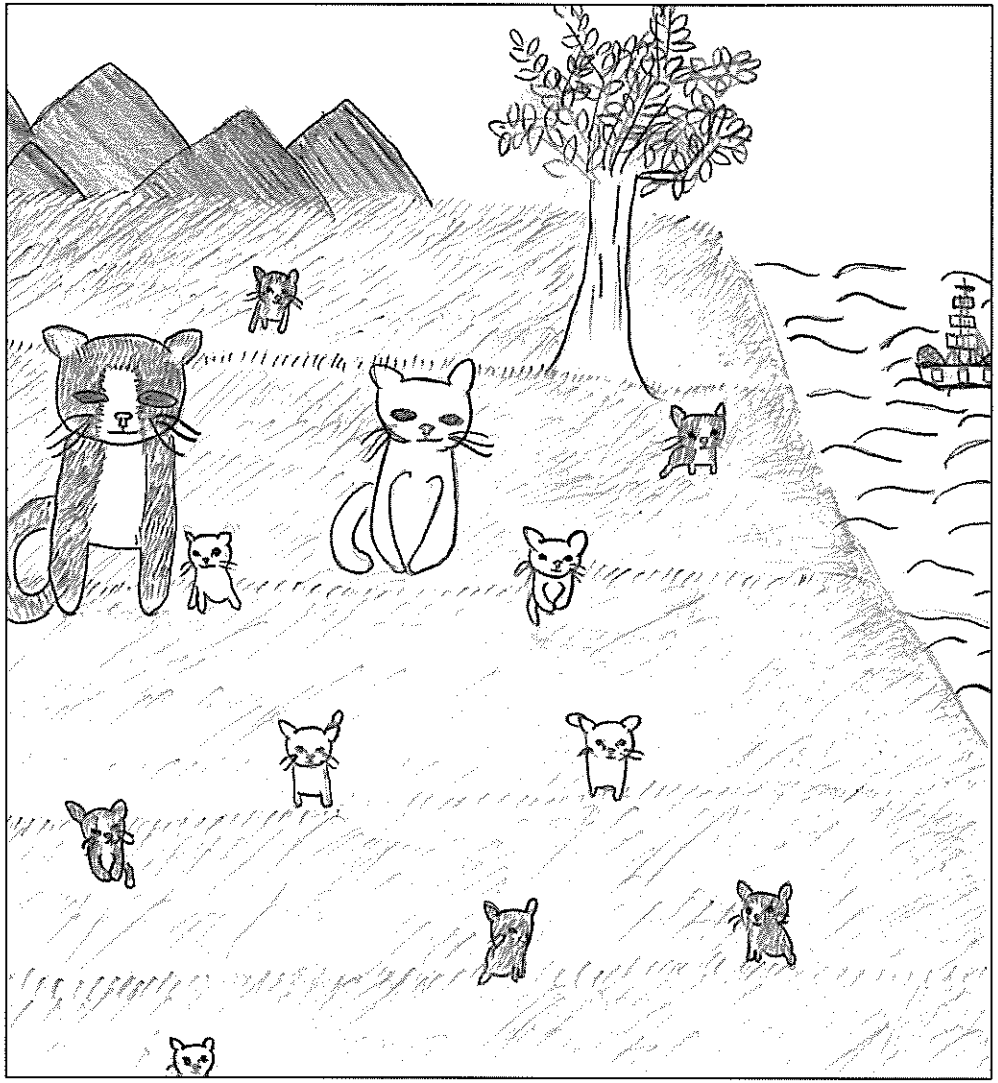


れ、この辺りにいた猫と違い尻尾の短い三毛猫でした。背中を撫でると、普通の猫とは反対に背中を持ち上げるので、それがまた可愛いと珍しがられ、その愛らしさと珍しさで全国で評判になり、「カナカナ」と呼ばれ、どこへ行っても可愛がられたそうです。

・・・そして今

「唐猫」の死んでいた畑は「ねこ畑」と呼ばれ、今でも六浦荘団地の裏山に名前が残っています。その後、千光寺と言うお寺の境内に供養のための「ねこ塚」が造られました。千光寺が昭和58年に東朝比奈へ引っ越した時、一緒に移り、今ではそこに三角形の石が「ねこ塚」として樹の茂みの中にひっそりと建っています。

もしかしたら、みなさんの近くで「ニャー」と鳴いている猫も唐猫の遠い子孫かもしれませんよ。



文　氏家　總子（ふさこ）
絵　大谷　朋代（ともよ）

日荷上人

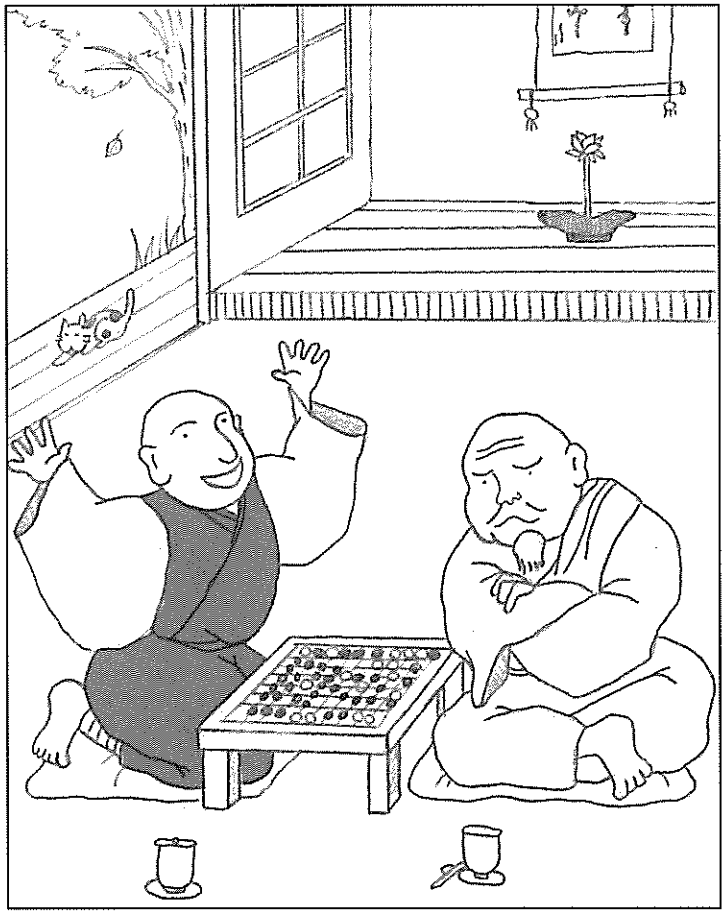
今から650年ほど昔。六浦の上行寺というお寺に、大変力持の妙法という住職がおりました。ある夜、ぐっすり眠っていた妙法は不思議な夢をみました。大きな仁王様が現れて「私は称名寺の仁王です。身延山の守神になりたい。お前のその力で私を身延山のお寺まで運んでくれまいか」と言うのです。

あまりに真剣なその様子に、妙法はさっそく称名寺の住職に、仁王様をゆずってくれるよう頼みましたが、「大事な称名寺の宝をゆずるなんてとんでもない」と断られてしまいました。その後も夢の中に現れては「身延山に行きたい」という仁王様の願いに、妙法は称名寺の住職が碁がとても好きなことを思い出し、いいことを考えました。

そして何日かすぎたある日、妙法は称名寺に住職を訪れ、碁の勝負を申し込みました。二人とも夢中になって、お昼前から始めた碁はなかなか勝負がつかず日も暮れて、妙法が勝った時にはもう夜があけていました。

実はその日の勝負には一つの約束がありました。それは妙法が勝ったら、称名寺の仁王は妙法のもの、反対に負けたら何でもするということでした。でもその時、早く大好きな碁を始めたくてうずうずしていた称名寺の住職は、その言葉をうっかり聞き逃していました。

だから勝った妙法が「約束どおり仁王様を頂いて帰ります」といった時にはびっくりしてしまいました。



「お寺の大事な仁王様を渡すなんてとんでもない」と断り、心の中では・・・あんなに重い仁王様を持って帰れるはずがない・・・とも思っていました。

妙法はその日は帰りましたが、ある夜、称名寺に行き、仁王様を縄で背負うと寺

から運びだしてしまいました。重たい仁王様を二つも背負い、三日間寝ないで山道を歩き続け、身延山の立派なお寺につきました。

お寺の住職は、大きな仁王様を背負い現れた、怪力の妙法に大変驚きましたが「この仁王様をお寺にぜひ納めてください」という妙法の言葉と立派な仁王様に大変喜びました。

この住職は身分の高いお坊さんでしたので、そのお礼にと妙法に『日荷上人』という名前を与えました。住職である以上貴い名前を頂くのは名誉なことでしたので、妙法はとても喜びました。

帰りは足取りも軽く身延山の林を歩いていますと、ふと傍らに今まで見たこともない木を見つけ、三本持ち帰りました。それは「カヤ」の木だと分かり、自分の家、杉田の妙法寺、六浦の上行寺にそれぞれ植え、大切に育てました。

やがて時がたち、今も力持ちの妙法によく似たガッチリした形のカヤの木は、足の丈夫だった妙法にちなみ「わらじ」と共に足の守神として、上行寺の庭に昔を語るように立っています。その後横浜市の名木の指定も受けましたが、このカヤの木が、最高の「碁盤」を作ることをみなさんは知っていましたか？

文　氏家　總子（ふさこ）

絵　池田　利恵

塩なめ地蔵

今から８００年程昔。その頃の金沢の海に面した釜利谷、洲崎、町屋、六浦、野島など、ほとんどの村では塩づくりが盛んでした。村人達は朝比奈の切り通しを越え、鎌倉まで塩を売りに行きました。

昔は車などなかったので、塩を籠に入れ、天秤棒で肩に担いで歩いて朝比奈の峠を越えました。重い荷物を担いで、六浦から峠を越えて行くのはずいぶん大変だった事でしょう。峠の上のお地蔵様のところまで来ると、塩はズーンと重くなり天秤棒が肩に食い込み、体中汗びっしょりでへーとへと。だから村人達はいつもお地蔵様の前で一休みしました。すると疲れも取れ、村人達はいつもありがたく思い、「今日もたくさん売れますように」と、お地蔵様に大事な塩をひとつまみ供えてお願いしました。その頃政治の中心であった鎌倉は大変にぎやかで人も多かったので、金沢の美味しい塩はよく売れました。帰り道は荷物も心も軽くなり、朝比奈峠のお地蔵様の前でまた一休みしました。「今日もありがとう」とお礼を言って、「さぁ帰りましょう」とふと見るとたしか朝行くときにお供えした塩がそこにありません。辺りを見回しましたがどこにも無く、お地蔵様はただ微笑んでいるようでした。

塩のなくなった事が本当に不思議で、帰ってから他の村人たちに聞くと、みんなも同じ経験をしていました。それから、そのお地蔵様は「塩なめ地蔵」と呼ばれるようになりました。

今、そのお地蔵様は、鎌倉の十二所（じゅうにそ）にある光触寺（こうそくじ）というお寺の境内に残っています。

文　氏家　總子（ふさこ）

絵　吉広　恵理子

目つぶし阿弥陀

昔、金沢村に宝樹院というお寺がありました。

お坊様はあるとき、お寺を若いお坊様に頼んで旅をしていました。

ある日、漁村を通りかかりますと何か変です。とても良いお天気なのに、村人が漁に出ていません。そればかりか、人の姿も見えません。不思議に思って歩いて行くと、どこからか村人たちの声が聞こえてきました。声の方に行ってみると、どうやら集まって何やら相談しているようです。

お坊様は「これこれ、みんなそろってたいそうお困りの様子じゃが・・・」と言いながら、村人に近づくと、思わず「はっ」と息をのみました。お坊様の声に振り返った村人たちは、みんな目が見えないのです。

—そうか、それで海に誰もいなかったのか。それにしても村人たちみんなの目が見えないとは何か訳があるに違いない。悪い目の病気でも流行っているのだろうか？—と思い、訳をたずねました。

一人の村人が言いました。「実は2日程前、いつものように海で漁をして、帰ろうと海辺を歩いていたら、遠くの方から何やら大きな物が流れてきましただ。『大きな魚じゃなぁ。よし、あれを捕まえて今日の土産にしよう。きっとみんなが驚くじゃろう。』とワクワクしながら待っていたが、近づいてきて驚いた。なんと、この辺では見たことのない大きくて立派な仏様じゃった。海からヨイショ！ヨイショ！と引き上げたんじゃが・・・」

他の村人たちも口々に言った。

「海から上げた途端、仏様の目からものすごい光が出てきただ」

「この間の嵐の雷さんの何倍もすごい光で、みんな目が眩んだだ」

「不思議なことがあるもんじゃと、おっかなびっくり目を開け

てみると、真っ暗で何も見えねえだ。仏様を見た者はみんな目が見えなくなってしまっただ。」

「いや、そればかりじゃねぇ。話を聞きつけて集まった他の者も、よせばいいのに見ちまったもんで、このとおりみんな目が見えなくなってしまっただ。」

「これでは、漁をすることも、畑を耕すことも何にもできねぇ。これからどうしたらいいかと、相談しているところですだ。」と見えない目をむけて、口々にお坊様に言いました。

この話を聞いたお坊様は、「仏様は人々の幸せを願うはずなのにきっと何か訳があるに違いない。それにしても早く何とかして、村人達を助けなければ」と思い、大きな仏様の体中にお経を書いた沢山のお札を貼り、一心にお祈りをすると、不思議なことに村人たちの目が見えるようになりました。

その時どこからか、お坊様の心に低い厳かな声が聞こえてきました。「私は阿弥陀如来です。ひたすら人々の幸せを願ってきたが、あちらこちらと人手に渡り、ゆっくり心を落ち着ける事が出来ず、すっかり疲れてしまった。しかし、お前の心からのお経に私の心も十分に慰められた。ありがとう。」

その後、村人達の手で、大事に運ばれた阿弥陀如来様は、今でも大道の宝樹院に大切に祀られているそうです。

阿弥陀様でも人間のように心のゆらぐ時があるのでしょうか。それにしても『心からの祈り』は仏様の心さえいやす力があるのですね。

文　氏家　總子（ふさこ）

絵　小泉　喜久江（きくえ）

金沢の民話

【編集・文】　氏家　總子　【金沢区文化協会理事（児童文化部）】

【編集】　楠山　永雄　【金沢区文化協会顧問】

一之瀬　烱次　【金沢区文化協会理事（歴史部）】

白井　俊一　【金沢区文化協会理事】

岡本　溢子　【元六浦小学校教諭】

【参考資料】

「ぶらり金沢散歩道―歴史・伝説・民話を歩く―」（著者：楠山永雄）

「武州　金沢のむかし話」（発行：横浜市立大道小学校ＰＴＡ）

「金澤今昔地図　金澤発見伝（其の弐）」（発行：金沢区役所）

【挿し絵】

小泉　喜久江　（表紙・筆すての松・目つぶし阿弥陀）

池田　利恵　（長浜の身代わり観音・日荷上人）

佐々木　怜奈　（へそ薬師）　西柴小学校

大谷　朋代　（金沢猫）　西柴小学校

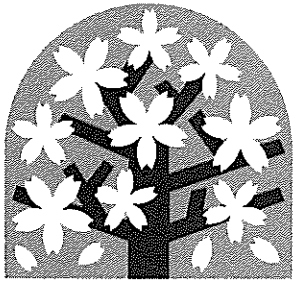
吉広　恵理子　（塩なめ地蔵）　西柴小学校

【協力】　金沢区文化協会

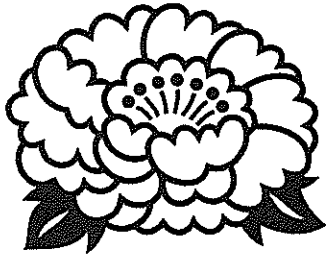
【発行・制作】　金沢区役所

平成18年3月31日発行

金沢区シンボルマーク



区の木　山桜



区の花　牡丹

金沢の民話

発行年月日：平成18年3月31日

*

編集発行：横浜市金沢区役所地域振興課

〒236-0021　横浜市金沢区泥亀2-9-1

TEL. 045-788-7804

FAX. 045-788-1937

印刷：株式会社　野毛印刷社

横浜市広報印刷物登録　第170727号

種類・分類　B-QA100

横浜市金沢区へ向け ハマッチが行進します！ ヨコハマはG30

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています